藤枝靜男著作集

第二巻

藤枝静男著作集

講談社

藤枝静男著作集　第二巻

昭和五十一年九月十二日第一刷発行
昭和五十五年四月三十日第三刷発行
著者／藤枝静男
発行者／野間省一
発行所／株式会社講談社　東京都文京区音羽二―一二―二一　郵便番号一一二
電話／東京（〇三）九四五―一一一一（大代表）　振替東京八―三九三〇
印刷所／信毎書籍印刷株式会社
製本所／大製株式会社
定価／二九〇〇円

©藤枝静男　昭和五十一年　落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。Printed in Japan

0393-138726-2253(1)　(文1)

藤枝静男著作集　第二巻　目次

〈小説〉

壜の中の水　11
硝酸銀　70
冬の虹　123
私々小説　142
盆切り　153
一枚の油絵　162
山川草木　176
風景小説　192
接吻　205
しもやけ・あかぎれ・ひび・飛行機　224

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

〈随筆I〉

瀧井孝作氏のこと　237
尾崎一雄氏との初対面　242
埴谷氏のこと　245
小川国夫のこと　248
アポロンの島　261
海からの光　262
気楽なことを　264
古山氏のこと　268
プレオー8の夜明け　270
若い小説家たち　272
三好十郎氏のこと　274
三好十郎著作集第三十四巻　276

上司海雲氏のこと 278
園池さんのこと 282
原勝四郎氏のこと 284
曾宮氏のこと 287
「曾宮一念の画業展」を見る 292
内田六郎さんのこと 293
救世主K先生 296
先生 299
三好君に 301
〈随筆Ⅱ〉
日野市大谷古墓出土蔵骨器 307
阿弥陀如来下向す 311
偽仏真仏 314

薬師寺東院聖観音 325
弥生式小壺 326
法隆寺と私 327
奈良・飛鳥日記 329
当麻寺 331
横好き 333
ケチな横好き 358
当てずっぽう 360
わからぬこと 363
似たようなこと 365
他称大家 369
あやふやな思い出 371
大正十一年三月八日 373

孫びき二つ　377
庭の皮はぎ　382
火事と泥棒　384
選挙　386
明治村　389
カツギ屋　395
スッポン　399
気になる傾向　400
解説　403
初出一覧　412

装幀　辻村益朗
口絵写真撮影　野上　透

藤枝静男著作集　第二巻

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

小説

壜の中の水

湖にちかい小都会の一隅にうつり住んで十五年あまりになる。年は満五十七であるから、もう断じて青年ではない。このごろ私は老人ぶることに決めた。

私は医師であるから、まず患者にむかって自分のことを「わし」と云うことにした。よぼよぼの年寄りに対しても同様である。すると、その瞬間から、不思議に自分が彼等の仲間入りをしたような気分におちいり、威厳が増したことを自覚した。次にできるだけ服装をダラシなくした。髭は気のむいたときに剃り、外出の際にもセーターやカーディガンを好きなだけ重ね、あつい靴下を二枚くらいはき、無帽にサンダル履きということにした。

その結果として、現役意識みたいなもの、なんとなく社会に責任があるような変な気分から釈放されてせいせいした。そうしてこれが私にとって消極的健康法であり、また精神的自衛手段でもあることをさとった。幸運にも三十歳前後から薄くなりはじめた私の頭は今はほとんど完全な丸禿げと化しているから、客観的印象としてもまた六十以下に見られる恐れはない。

子供の時分、大人というものは何と嘘つきだろうと苦しかった。何故ていねいな言葉をつかって会話するのか、それにさえ不信の念をいだいた。学生時代には、自分は社会のことは何ひとつ解りは

しない、自分の正しいと思うことはすべて観念的非実際的でどこにも通用しやしない、という想念に悩まされた。社会生活に身をひたさず、働いて金をとることをしらぬ自分には、なにを判断する力も、なにを主張する権利もありはしないと考えた。このことが、私を左翼運動におしやろうとする内部の欲望にブレーキをかけた。唯物弁証法があらゆる現象を説明しうるということ自体が私を疑念に追いやり、それを駆使してらくらくと私を裁断する同級生たちに強く反撥した。こういう最も幼稚な頑固さが、私の生来の怠惰な性格とむすびついて、マルクス主義理論を学ぶことから私をしりぞけた。私は後悔と劣等感とに苦しみながら、しかしただ目前のささいな出来事にたいして、感傷的な正義感だけで衝動的に同感したり反撥したりしながら、青年時代の大部分を過ごした。

そして医者になり、医局という、個人の利害関係の最初の萌芽をふくんだ集団にはいり、それから勤務医となって社会にでて行き、やがて戦争にまきこまれ、地方の開業医となり、そうしてうやむやのうちに生まぬるい人間関係のなかにとけこんだ。

そこで見掛けだけは正常な生活をいとなみ、患者にむかっては世間が解ったような口をきき、挙句の果てに何もかも嫌になり、自分にも嫌気がさし、今こうして老人ぶって、あっちこっちを一人で放つき歩いているのである。

二人の子供は大学にはいって東京に居るし、妻は去年やった手術が失敗したので一年後の正月にふたたび入院して再手術をうけた。手術は四時間あまりかかり、一時は血圧が六〇粍にさがって脈も触れなくなったが、辛うじて恢復し、結局は成功におわった。その後の病状に心配はない。平静な心を抱き、うす汚いふうをして外出しうる幸福を天に感謝している。

このあいだは、珍らしく暖く風もなかったので、街はずれの丘の辺りをしばらくぶらついてか

ら、藪をぬけてせまい谷を見下ろす斜面に腰をおろして弁当を食った。
頭上の枝に山鳩がきて含み声でみじかく啼くのが、艶っぽく魅力的であった。谷のむこう側の低い雑木の山の裾をめぐって伸びている小道を眼で追って行くと、そのさきに湖の一部が白くキラキラと光っていた。
道のこちら側は一面の黒い田圃で、すでに春めいた湿り気と香りとが、土の表面から立ちのぼっていた。
田を貫く細流の一個所が灌木におおわれていて、そこから一本の中くらいのモチの木が抜けでているが、これは天正のむかし築山殿が殺された位置をしめす標識となっている。
家康は、自身生きのびるために、信長の命によって長男信康を殺し、つづいて駈けつけた妻をもここに待ち伏せて殺したわけである。彼は晩年日課念仏を書いて彼等の後生を仏に願っていたというが、しかしものの本によると、臨終の際には、枕頭の脇差を家臣にわたして罪人の試し斬りをさせ、よく斬れたと聞くと「それならそれを神体にしておれを祀れ」と遺言して死んだということである。
もっとも、この世で、彼だけが残忍だったわけではない。築山殿の廟はこの近くの寺にあるが、太平洋戦争では直撃弾をうけて土壁は飛散し、墓も真二つに割れた。今は背中と周囲とをべったりとセメントで固められ、ちょうどギプスに締めつけられた不具者のような醜形を呈してうす暗い墓地の中央に立っているのである。
私はむすびを食いおわり、煙草をくわえてぼんやりしていた。眼のしたの矮小な裸木が、連翹らしい蕾を満身につけていた。むこうがわの雑木山から二、三羽の烏が舞いたって来て、水の浸みでた田圃に下り、いかにも気のなさそうな様子で餌をあさっていた。

しばらくすると、背後の藪のなかをガサガサと歩きまわる音がして、鳥打帽をかぶった背の低い男があらわれ、「やあ」と云って降りてきた。宍戸であった。彼とは、前年の冬のはじめころ、識りあいの家ではじめて出会った。このとき彼は、自分の家に古い壺が沢山あるから見に来ぬかと私を誘い、それ以来ときたま顔をあわせる程度のあいだがらである。偶然にも今日またここで出会ったわけである。

宍戸は土蔵の潰し屋をやっている。

戦災をまぬがれた湖の奥の旧家の片隅に、今はただ場所ふさげの邪魔ものと化して残った土蔵を潰すのである。厚い壁と、それに塗りこめられた太い骨格を解体する術は、現代の大工にはもう失われているから、この男のように敏捷で果敢な老人をたのんで、一戸前いくらと請け負わせるのである。勿論たえず要求があるわけではないし、職業として独立したものでもないし、また専門の修業というようなものがあるのでもない。ただ少数の人にしかできぬ仕事であるから、割りのいい小遣いかせぎにはなるのである。

そこで潰すときめて、持主がまず古物商を呼んで土蔵の中身をひと倉いくらと二束三文で売り払うわけだが、そのとき、取りこわしの下検分にはいった宍戸が、古物商の捨てて行った水甕とか種壺の類をひろって家に持ちかえる。それがたまっているから見に来い、と云ったのである。

これらの、大きいばかりで値段のない壺類は、煤けたり欠けたりしたままで、たいがいは蔵の片隅か庭の端か床の下かに転がっている。多くは室町時代から桃山または江戸初期に常滑あたりの窯で焼かれたものであるが、そういう誰も相手にせぬ駄物に私が惹きつけられ、一個あたり三百円から六百円どまりで蒐めだしてから約十年になる。はじめて宍戸と出合ったのも、向こうは向こうの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com